

## 極小未熟児の再入院と生活管理上の問題点

(分担研究：新生児・乳児の在宅療法と生活管理をめぐる保健指導に関する研究)

研究協力者 井村 総一

**要約：**極小未熟児を対象に、NICU退院後の再入院について検討し、生活管理上の問題点を探った。再入院率は34.6%と高率で、退院後1年目に危険性が高いが、2年目には有意にその率が減じ、加齢は再入院の危険性を規定する大きな因子と考えられた。再入院をしなかった例と比較すると、同胞(兄弟)を有する例に再入院が多い傾向にあり、季節的には、晩秋から冬場にかけて多くなり、夏場に少ない傾向にあった。免疫グロブリンサブクラス(IgG<sub>2</sub>)の測定によって、ハイリスクの症例を早期に発見し、その予防あるいは重症化を防止しうる可能性が示唆された。

**見出し語：**再入院、極小未熟児、危険因子、IgG<sub>2</sub>値

s t testを用いて行った。

**目的：**2年以上追跡可能であった極小未熟児について、加齢に伴う再入院率の変化を中心に検討を加え、NICU退院後の生活管理上の注意点および呼吸器感染の予防ないし重症化防止の可能性を探った。

また呼吸器系感染症との関連性を検討する目的で、一部の例について血清IgG<sub>2</sub>値の測定をELISA法を用いて行った。

**対象と方法：**NICU開設時(1987年10月)から1989年12月の間にNICUに入院した出生体重1500g未満の児123例のうち、生存退院(106例)し、退院後2年間定期的に追跡できた98例(平均在胎週数28.9±3.0、平均出生体重1126±246g)を対象とした。これらの例について、定期的なフォローアップから再入院(他院への入院を含む)例を抽出し、その危険因子を中心に検討した。統計処理は $\chi^2$ testおよびStudent'

**結果：**NICU退院後2年間における再入院率は34.6%と高率で、とくに1年目に多く、2年目には有意に減少した(表1)。疾患別にみると、外科疾患の頻度は1年目、2年目を通してかわりなく、内科疾患(その2/3は呼吸器系感染症)による再入院が2年目に著しく減少していた。

再入院をしなかった例を対照として、再入院の危険因子を比較したが、いずれも有意差はなく、母親の年齢、同胞の有無にも差は認められなかった(表2)。また十分には把握できなかつ

たが、栄養法、親の喫煙、保育所への入所などの因子についても明らかな差はないように思われた。再入院時期を月別でみると、内科疾患の場合、晩秋から冬場に多くなり、夏場に少ない傾向が認められた。

呼吸器感染で、再入院を繰り返す3例についてIgG分画の測定を行った結果、いずれもIgG<sub>2</sub>は50mg/dl以下の明らかな低値を示していた。

**考 察**：NICU退院後2年間における極小未熟児の再入院率は34.6%と高率で、退院後1年目にその危険性が高いが、2年目には有意にその率は減じ、加齢は再入院の危険性を規定する大きな因子と考えられた。

危険因子の比較では統計的有意差はないものの、同胞（兄弟）を有する例に再入院が多い傾

向にあり、時期的には冬場に多いのでこれらの児のNICU退院後1年間の生活管理にあってはとくに注意すべき事項と思われる。

また、定期的な外来通院と罹病時の早期受診等の指導、さらに医療側として常時入院可能な体制をとるなど、親に対して安心感の保証を与えることも必要であろう。

再入院の多くが呼吸器系感染症で、このような感染リスクの高い症例を早期に発見し、その予防あるいは重症化を防ぐ方が望まれる。今回の検討から、IgGサブクラスの測定を行うことで、ハイリスクの症例を早期に発見し、抗生剤の早期投与や免疫グロブリンの補充療法、早期入院などで重症化を防止しうる可能性が示唆された。

表1 再入院例数と件数（出生時体重<1500g）

	総 数	退院後の期間	
		0～1年 (n=98)	1～2年 (n=96)
例 数	34 (34.6%)	28 (28.6%)	13 (13.5%)
件 数	58	42	16
入院回数			
1	21	20	12
2	8	5	2
3	3	4	0
4	3	0	0

\* 1987,10～1989,12 の間に出生し、NICU退院後2年以上追跡した例

表2 再入院の危険因子（出生時体重<1500g）

危険因子	再入院例 n = 27	非再入院例 n = 71	P
性別： 男	16	39	NS
女	11	32	NS
在胎週数（週）	28.5 ± 3.4	29.3 ± 3.0	NS
出生体重（g）	1068 ± 246	1160 ± 244	NS
出生体重<1000g	12	22	NS
SFD	5	10	NS
人工換気日数	22.5 ± 29.9	12.9 ± 25.0	NS
NICU在院日数	118.1 ± 69.3	99.3 ± 50.1	NS
中枢神経系障害例	5	11	NS
母親の年齢	29.9 ± 5.9	29.8 ± 5.9	NS
同胞の有無	14	27	NS

\* 内科疾患による再入院



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:極小未熟児を対象に、NICU 退院後の再入院について検討し、生活管理上の問題点を探った。再入院率は 34.6%と高率で、退院後 1 年目に危険性が高いが、2 年目には有意にその率が減じ、加齢は再入院の危険性を規定する大きな因子と考えられた。再入院をしなかった例と比較すると、同胞(兄弟)を有する例に再入院が多い傾向にあり、季節的には、晩秋から冬場にかけて多くなり、夏場に少ない傾向にあった。免疫グロブリンサブクラス (IgG2)の測定によって、ハイリスクの症例を早期に発見し、その予防あるいは重症化を防止しうる可能性が示唆された。